

境界例心性からみた大学生の臨床的理解と支援

江上, 奈美子

<https://hdl.handle.net/2324/2236330>

出版情報 : Kyushu University, 2018, 博士 (心理学), 論文博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)

氏名	江上 奈美子		
論文名	境界例心性からみた大学生の臨床的理解と支援		
論文調査委員	主査	九州大学	教授 吉良安之
	副査	九州大学	教授 黒木俊秀
	副査	九州大学	准教授 小澤永治
	副査	九州大学キャンパスライフ・健康支援センター	准教授 福盛英明

論文審査の結果の要旨

本論文は、境界例心性のアセスメントのための尺度を作成し、境界例心性が強い大学生について自我機能や家族関係から理解を深めるとともに、そのような大学生に対する心理的支援について学生相談の特性をふまえた視点から考察を行ったものである。

第1章では、先行研究を概観したうえで、境界例心性の定義を「社会的・文化的に逸脱しない範囲ではあるものの、対人関係・自己像・感情の不安定および空虚感・著しい衝動性などの人格的特徴」とし、境界例心性を境界性パーソナリティ障害と連続したモデルと捉えて理解し、支援について検討することが論じられている。

第2章では、既存の境界例心性尺度を改定してアセスメントのための質問紙を開発しており、空虚感、感情の不安定性、衝動性、自己像の不安定さ、対人関係の不全、見捨てられ抑うつ感の6つの下位尺度を見出し、信頼性と妥当性を検討している。さらに、大学生の境界例心性の強さと自我の柔軟性、防衛機制の関連について検討し、自我の柔軟性は境界例心性が強い群がもっとも低いこと、境界例心性が強い群ほど投影や価値下げなどの不適応的な防衛機制をとりやすいことが示されている。さらに、境界例心性が強い大学生は学業面でも対人関係でもネガティブな体験が多く対人関係ではポジティブな体験が少ないこと、また学業面でのポジティブなイベントの体験の頻度は境界例心性が弱い大学生と差がないものの、快感情を抱きにくいことが示されている。

第3章では、境界例心性と家族との関係について検討している。まず母親・父親の養育態度との関連性について検討した結果、特に女子学生において母親・父親の「情緒的・受容的な養育態度」と境界例心性に負の関連性が見出されている。次に、家族の雰囲気との関連を検討した結果、「冷淡・厳格な雰囲気」と境界例心性との間に正の関連性が見出されている。さらに、学生・母親・父親の家族機能の評価が境界例心性とどのように関わるかを検討した結果、母親および父親の評価と境界例心性には関連が見出されず、学生本人がもつ自分の家族の評価が境界例心性と関連を持つことが見出されている。

第4章では、境界例心性が強い学生を対象に、大学の相談施設において行われたカウンセリングの一事例が提示され、境界例心性の強い学生に対して、侵襲的でなく安心して語れる関係を形成し、家族をはじめとした対人関係や自己について捉え直すことの意義や、身体化や行動化が激しい場合には学内外の医療・相談機関と連携してともに学生を支える環境を形成していくことの重要性が論じられている。

第5章では、総合考察としてまとめと意義を述べるとともに、本研究の限界として、質問紙調査を行った母集団によって尺度得点の平均値に差が生じており今後はサポートが必要となる基準点を設ける必要があること、質問紙調査の対象に境界例心性の非常に強い学生を含められていない可能性があることなどから、調査手続きや分析方法にさらに追加の余地があることが挙げられている。また今後の展望として、相談施設に来談しない学生への支援、早期発見や予防の視点からの支援、成人期における心理的支援、境界例心性が強い大学生の周辺の人々に対する支援などの視点が提示されている。

本研究は、対人関係、自己像、感情が不安定で空虚感や顕著な衝動的傾向が見られる大学生について、境界性パーソナリティ障害と連続したものとして境界例心性の観点を提示し、そのような学生のアセスメントのため、既存の尺度を改定して新たに尺度を開発した点、その尺度を用いて境界例心性の強さと自我の柔軟性、防衛機制の関連について、また学業面や対人関係面での傾向に関して調査を行い知見を得ている点、境界例心性の強い学生の家族との関係を詳細に検討している点、学生相談においてカウンセリングを行った一事例を提示して面接過程を検討し、境界例心性の強い学生に対する心理的支援の要点を論じている点において、新たな視点を提起するものであり、独自の重要な知見を見出している。臨床心理学の立場から境界例心性の強い大学生に関する理解を深め、支援を行っていくうえでの大きな貢献をなすうる研究として高く評価される。

以上のことから、本論文は博士（心理学）の学位に十分に値するものと認める。